

オーストラリアでの国際交流活動を通しての学生の学び

－2017年度オーストラリア研修報告－

井上 弘子¹⁾*・山内 圭¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部

(2018年11月21日受理)

本学の理念に掲げている国際的な視野に立ち社会へ還元できる人材の育成に向け、毎年国際交流活動をおこなっている。学生へ研修の参加を募り、参加を希望した学生の所属学科・履修学年を踏まえた学修内容を企画し、2018年3月にオーストラリアでの研修を実施した。研修終了後に学生へ研修内容の評価と到達度、研修を通しての感想についてアンケート調査を実施した。結果、ホームステイでの生活、語学学校での語学学修を通して、積極的なコミュニケーションの必要性を痛感し、異文化を知り自己の価値観を変化させることが出来ていた。また言葉や文化は異なっても、他者を思いやる気持ちは共通であることに気が付くことが出来ていた。反面、コミュニケーションが上手くできなかった学生は英語が出来ないことに対してストレスを感じている状況がみられた。今回の研修を通して課題を抽出し、今後への対策を考えた。

(キーワード) 国際交流活動、オーストラリア、看護学生、コミュニケーション

はじめに

文部科学省は教育再生会議の中で、大学教育の在り方とは、社会の多様な場面でグローバル化が進む中、大学はグローバルな視点をもって地域社会の活性化を担う人材を育成し、大学の特色・方針・教育研究分野、学生等の多様性を踏まえた効果的な取り組みを進めることが必要であると提言している¹⁾。大学で学ぶことで教育・研究力を向上させ、地域から日本の学術・文化を世界に発信し広める人材を育成する必要性が高まっている。その一方で多くの日本人は、十分ではない英語力のため、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態が生じている²⁾。新見公立大学の理念として「誠実・夢・人間愛」を建学の精神とし、人と人とが繋がり合う地域に根差した大学として、地域を拓く優れた人材を育成するとともに、専門領域の研究の成果を国際的な視野に立ち広く社会へ還元することを目指している。大学の理念である国際的な視野に立ち社会へ還元できる人材育成に向けた科目として「国際交流活動」を設置している。科目概要は、オーストラリアやアメリカの先進国の文化や暮らし医療体制や看護機能などを学ぶ。また、カンボジア研修を通して発展途上国の生活や人々の暮らし、健康上の問題を学ぶ内容としている。今回は2018年3月に行ったオーストラリアでの語学学修を含めた国際交流を通して学生が感じたこと、修得できたこと、また困難に感じたこと等をまとめたので報告する。

1. 活動内容

1. メルボルンランゲージセンター(写真1)受け入れまでの経過

科目担当教員が4月と12月に国際交流活動の科目概要とオーストラリアでの国際交流活動について学生へ説明し、研修の参加希望を募っている。オーストラリア研修に向けて参加希望があった学生の所属学科や履修学年を踏まえ、メルボルンランゲージセンター(以下:現地)スタッフと協働で研修内容を企画している。



写真1 メルボルンランゲージセンター

*連絡先: 井上弘子 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

表1 オーストラリア研修スケジュール

Date	Arrivals/Departures	AM activity	PM activity
Day 1 Mar 21 Wed	7:55 It gathers at Kansai International Airport 9:55 Depart at Kansai International Airport by MH053		
Day2 Mar 22 Thu	8:45 Arrive at Melbourne International Airport by MH149 (Connection from MH053) and transfer to MLC City Campus by a chartered bus(arranged by Travel Agent)	10:00-12:00 Orientation	12:00-13:00 Welcome Lunch 13:00-16:00 City Sightseeing with ESL Teacher 16:15 Meet Host Family
Day3 Mar 23 Fri		9:00-12:00 English Lesson (15 mins break)	12:45-13:45 Lunch 13:45-15:45 Australian Health Care system Lecture(Melanie Bahuth RN Service Development Manager Remedy Health Group)
Day4 Mar 24 Sat		Free Time	Free Time Applicant :Penguin Tour
Day5 Mar 25 Sun		Free Time	Free Time
Day6 Mar 26 Mon		9:00 Leave Campus 9:30-11:30 East Melbourne Childcare Cooperative powlett Reserve Center 12:00 Return to Campus	12:00-13:00 Lunch 13:00-16:45 English Lesson (15 mins break)
Day7 Mar 27 Tue		9:00-12:45 English Lesson (15 mins break)	12:45-13:45 Lunch 13:45 Depart Campus 14:30-16:00 Royal Children's Hospital 16:30 Return to Campus
Day8 Mar 28 Wed		9:00-12:45 English Lesson & Certificate Presentation by ESL Teacher	Free Time
Day9 Mar 29 Thu		9:00 Dropped off by Host Family	Free Time until departure 12:00 Depart for Airport by a chartered bus (MH148)
Day10 Mar 30 Fri	5:40 Arrive at Kansai International Airpor		

2017年度は看護学科、幼児教育学科の15名の学生から参加希望があった。研修の4ヵ月前から現地スタッフと研修内容の検討を開始した。科目目標学生の特徴を反映させ国際的な視点を持つことができ、英語でのコミュニケーションスキルを学ぶことができるスケジュールを組んだ(表1)。具体的には「オーストラリアのヘルスケアシステムについての講義」「小児専門病院の見学」「保育園の見学と児との交流」「語学学校での語学学修」「ホームステイ」を企画した。ヘルスケアシステムについては、幼児教育学科の学修内容である子どもに関する内容を加えての講義を依頼した。語学学修としてはランゲージセンターでの講義、また生活の場は学生2~3人を1組でのホームステイとした。

2. 学内活動

研修に参加を希望している学生に対して、研修の約2ヵ月前(2018年1月26日)と約3週間前(2018年3月2日)に2回、学内活動を実施した。1回目は研修の目的と方法、過去のオーストラリア研修の資料を用いて概要やスケジュール、生活上の注意点を説明した。また、学生・教員が自己紹介を行い学生各自は、オーストラリア研修の目標を明確にし、

教員はオーストラリアの文化や歴史等の自己学修を促した。2回目は学生が海外での研修に対して不安な点を補っていくことを目的に研修スケジュールについて詳細な説明を実施した。

3. オーストラリア研修の実際

1)研修期間：2018年3月21日(水)~3月30日(金)10日間(うち移動3日間)

2)研修参加者：学生15名(看護学科1年生11名、幼児教育学科1年生4名)、教員2名

3)アンケート調査

研修後、参加学生を対象に事前の英語レベル・事前学習・研修の項目ごとの評価、修得できたこと、感想についてアンケート調査を実施した。対象学生へ口頭で内容を説明し、回答・提出をもって同意が得られたこととした。15名から回答を得た。

4)参加学生の語学力と事前学習

(1)研修前の英語レベル：読み書きはできるが、会話ができないレベルが最も多く9名(60%)、どちらでもない5名(33%)であった(表2)。

(2)取得している英語の資格：11名(73.3%)が実用英語技能試験2~3級を取得していた(表3)。

表2 研修前の英語レベル

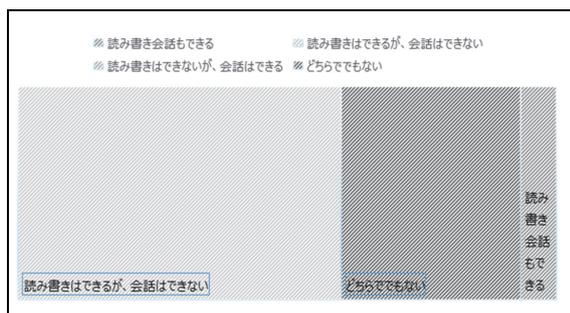
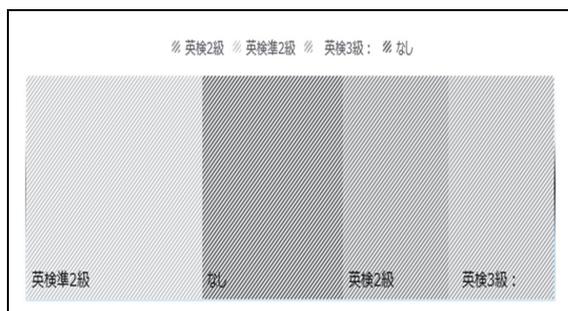


表3 取得している英語の資格



(3)研修にむけての英語自己学修:

4名(26.4%)が、英語の長文を読む、ラジオ英会話を聞く、ホームステイの参考書を見る、TOEICの過去の問題を解く、英語を聞き発音するという取り組みを行っていた。

5) 研修の活動内容と学生の評価・修得できたこと

(1)メルボルンランゲージセンター(以下語学学校)での語学学修

平日の半日(計4回)、学生15人に対して1名の語学学校の教師が継続して語学学修を担当した。教師からの英語での質問に対して、学生は英語での返答や絵をみて絵の内容を英語で説明(写真2)を行う学修が中心であった。時には近所の庭園へ外出(写真3)を行うなどのコミュニケーションを重視した学修プログラムを実施した。語学学修の開始当初は、英語のみで行われるプログラムに戸惑いを覚え質問を受けても黙りこんでしまう学生や、学生同士で日本語での会話をしてしまう学生の様子がみられた。しかし、レッスンの回数を重ねるごとに英語を聞くことにも慣れ、話すことへの抵抗感も薄らいでいった。後半は笑顔も多く、積極的に授業に参加している姿も見られた。語学学修を終えての評価では、語学学修の内容について全員が大変良い又は良いと評価していた。

英語のレッスンを受けてコミュニケーションがとれるようになったかという質問(表4)では、非常にあてはまる・あてはまるが8名(53%)であった。どちらでもない・あまりあてはまらないが7名(47%)と達成感を感じられている学生とあまり感じられなかったがほぼ同数であった。

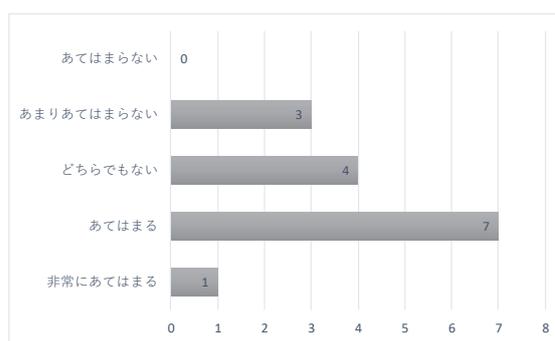


写真2 メルボルンランゲージセンター(語学学校)教室での学修の様子



写真3 メルボルンランゲージセンター(語学学校)学外学修の様子 庭園へ外出

表4 英語でのコミュニケーションがとれるようになった



い・あまりあてはならないが7名(47%)と達成感を感じられている学生とあまり感じられなかったがほぼ同数であった。

成長できた事についての自由回答では「もっと英語力を身につけたいと思った」「言っている内容がわかるようになってきた時に、耳が慣れてきたと思った」「実際に使いながら勉強できた」「怖がらずに外国の方と話す勇

気を持てた」という英語力の向上や、英語に対しての恐怖感が軽減したという英語を使っでのコミュニケーションに前向きな回答が多くみられた。少数ではあるが「他の人が理解できてはなかなか理解できず、あまり楽しいと感じられなかった」と他の学生達の学修のペースに付いていくことが出来なかったことから、学修に対してストレスを感じている回答がみられた。

(2)ホームステイでの生活

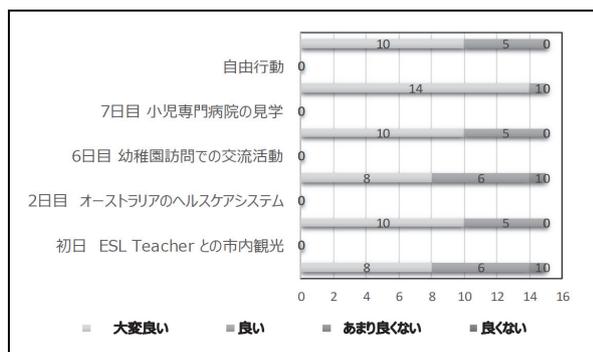
滞在中の7日間、学生2~3人が1つの家でホームステイを行った。通学は、ホームステイの場所から語学学校までは公共交通手段を利用した。学生はホストファミリーと会話でコミュニケーションをとるだけではなく、食事の準備や後片付けを行うことで交流を深めていった。また、学生が食材を購入しホストファミリーへ日本食をふるまったり、一緒にアクティビティーや食事に出かけるなど楽しいひと時を過ごした学生もいた。反面、海外で初めて異国の家族と共に生活をする中で、英語が理解できないまま、ホストファミリーとコミュニケーションを上手くとることが出来なかったと感じている学生やホームステイの住所によっては公共交通機関が少なく通学に困難を感じた学生もみられた。

(3)オーストラリアの文化について

オーストラリアの文化や暮らしについて、研修を通して文化・生活について学べたかという質問では、全員が非常にあてはまる・あてはまるという回答であった。日本以外の文化を学んだ事での気持ちの変化については「生まれた国によって常識が違うということを再確認し視野を広げることができた」「多様な文化を受け入れやすくなったと思った」「固定概念にとらわれず、いろいろなことを知っていききたい」「国は異なるが相手を思いやる事はどの国でも同じで、何とか会話しようとしてくれた人が殆どだった」と国際交流を通して自己の価値観を照らし合わせて、視野を広げることが出来ていることが伺えた。そして、文化が違っていても思いやる気持ちは同じであるという普遍的な部分に気が付くことができていた学生もいた。

(4)施設見学・その他

表5 施設見学・その他の評価



オーストラリアのヘルスケアシステムについての講義、小児専門病院の見学、保育園の見学と児との交流等の評価(表5)では、小児専門病院の見学が最も評価が高かった。

保育園訪問では園児達と一緒に言葉だけでなくの身体を動かし遊ぶことで、幼児教育学科の学生は日本の保育園とオーストラリアの保育園の安全性の違いを見つける事ができていた。日本は園児の安全を第一に考え危険物を最小限にする施設設計であるのに対して、オーストラリアは園内の広場にコンクリートを敷いており実際の生活に即した遊び場を設計していた。コンクリートを用いた意図としては、転倒をして傷を負うことで児自身が危険を理解することを大切にしていた。看護学科の学生から待機児童の問題など日本で問題になっている事象を質問があり、オーストラリアにおいても待機児童は大きな問題となっており、先進国での子育ての問題を知る事ができた。学生の発見や積極的な質問で日本とオーストラリアの保育園の状況を知ることができ、待機児童などの日本と同様の悩みを抱えている状況や施設設計では文化の違いについて学修することができた(写真4.5)。



写真4 保育園の園内(室内)の様子



写真5 保育園の園内(室外)の様子

小児専門病院の見学では、施設の案内係のスタッフからの施設内の特徴についての説明があり学生は一生懸命メモを取りながら興味を持って聞いていた。公立病院である小児専門病院の外来診療では日本と同様に長い待ち時間を強いられていた。待ち時間対策として多くのボランティアの方が活動をしており、アクティビティーエリアや待合室でも子どもたちが有意義な時間を過ごすことができるようにサポートをしていた。また家族が気持ちを落ち着かせるための部屋があり、様々な宗教



写真6 小児専門病院の院内の様子

の方が利用できるような場所も紹介をうけた。学生は日本の医療との違いを感じるだけではなくボランティアの必要性を痛感していた。施設スタッフへの質疑応答の時間、積極的な意見交換ができた(写真6)。

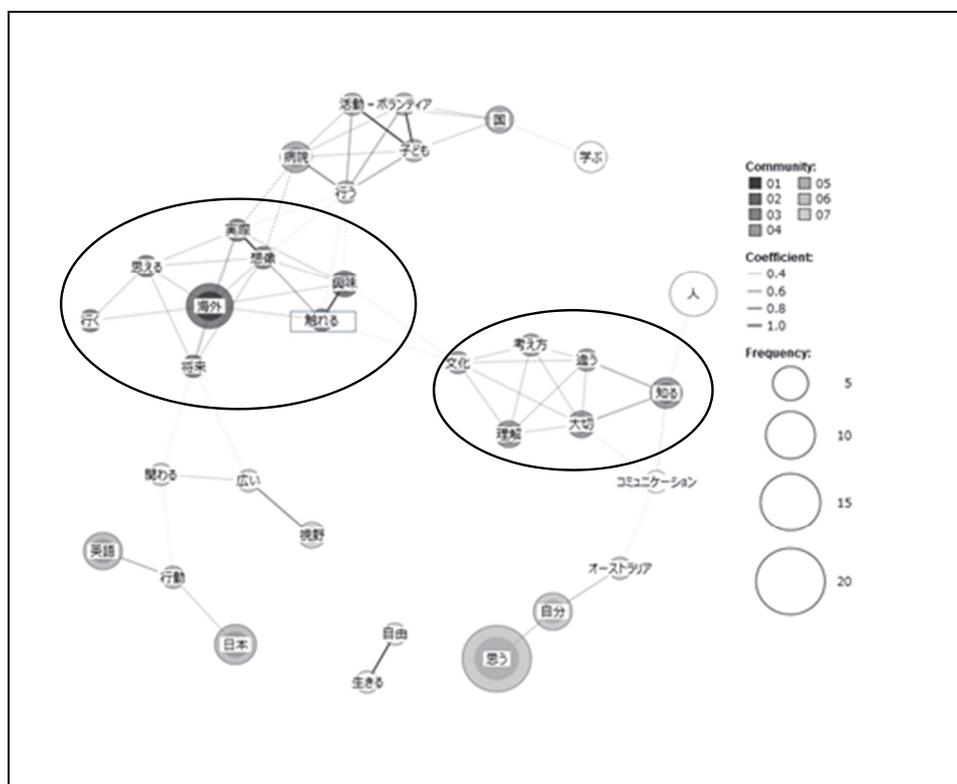
3. 国際交流活動の研修の活用

オーストラリア研修での学びを今後の国際交流活動にどのように活かしていきたいかを自由記述で質問を行った。回答した記述内容をデータとして集約後KHcoderソフトを使用してテキストマイニングにて分析後、共起ネットワーク(表6)を抽出した。「文化」「考え方」「違う」「理解」「知る」「大切」という共起関係から、生活の違いや考え方を理解することで、改めて海外の文化を知ることの必要性を感じていることが分かった。また、「触れる」「興味」の単語に共起関係が強く、加えて「海外」「行く」「将来」の単語にも共起関係がみられている。この共起関係から今回のオーストラリア研修を通して実際に海外の生活に触れる事で将来に海外での仕事に就くことに興味を持つことができたと考える。

4. 学生の体調管理

飛行機での長時間の移動、食生活・乾燥している気候・ホームステイ等の環境の変化から、嘔吐・下痢の症状や呼吸器感染症の症状を発症した学生が数名みられた。引率教

表6 研修での学びと今後の国際交流活動について



員は日々、学生の体調を確認し、必要時受診の手配や生活指導・健康管理を実施した。

5. 今後の課題

今回の研修を通して、学生は現地の人々とコミュニケーション、文化、語学を習得する必要性を実感できた背景には、語学研修に加え、生活の場をホームステイとしたことが大きく影響していると捉えた。生活の中で自然に異文化を受け入れ、英語での行動が積極的にできるようになったと考えられる。しかし、英語が理解できず生活でも困難を感じた学生や体調を崩した学生が存在した。

今年度までは「国際交流活動」は看護学科のみ単位認定される科目であったが、次年度からは、本学の全て(3学科)の共通科目として「国際コミュニケーション」となる。今回課題となった、語学力・ホストファミリーとの関係・体調管理を改善するため、以下の4点を考えた。

- 1) 事前に現地で生活に困らない程度の英語力を英検やTOEICを用いて提示。
- 2) 科目の中で現在の自己の英語力を知り、必要時は英語を学修できる時間を設ける。
- 3) 現地での研修中、学生自身が毎日目標を持ち、目標の達成感を得る事ができるように形成評価を行っていく。学生は目標の到達の有無について記録を行い、教員は記録を確認し、必要時は面接を行う。
- 4) 教員の引率は英語教員に加え、学生が容易に相談できるように可能な限り各科の教員を1名ずつ割り当て、体調の確認・メンタルサポートができる環境を整える。

今回の明らかになった課題については今後改善にむけて取り組み、国際的な視野に立ち広く社会へ還元できる学生の育成を今後も継続して行っていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省,これからの大学教育等の在り方について第三次提言平成25年5月,(アクセス日2018.9.7) http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf
- 2) メルボルンランゲージセンターホームページ (アクセス日2018.9.7) <http://www.melblang.com.au/>
- 3) 文部科学省,「英語が使える日本人」育成のための行動計画 平成15年3月31日, (アクセス日2018.9.7) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry0/04031601/005.pdf
- 4) 山本裕子・山内圭:国際交流活動における学生の学びーオーストラリア研修報告ー,新見公立大学紀要,38,179-183,2018
- 5) 吉田美穂・丸山純子:国際交流活動から得た学生の学びー2016年度カンボジア・スタディーツアー報告ー,新見